

生涯設計のための女子教育に関する研究

A Study on female education for a life design

戸田 里和

Satowa Toda

大妻女子大学人間生活文化研究所

Institute of Human Culture Studies, Otsuma Women's University

キーワード：女子大学生，生涯設計，キャリア教育

Key words : Women's university student, Life design, Career education

1. 研究目的

平均寿命の延伸による職業生活の拡大やライフスタイルの変化，高学歴化など，女性の生活自体が構造的に変化し，働き手としての女性が求められている．国立社会保障・人間問題研究所が 2015 年に実施した調査によると，未婚女性が理想とするライフコース（以下，理想ライフコース）は，1990 年代より専業主婦コースが減少し，両立コースが増加する傾向にある¹⁾．しかし，経済協力開発機構の発表した「雇用アウトLOOK 2015」によれば，日本女性の就業率は OECD 加盟 34 カ国中 24 位と低水準である．女子学生の将来に対する意識は男子学生に比べ低く，教育現場でも，依然として専業主婦への憧れや，出産を機に退職を希望するなど，生涯働き続けるという意識も低い様子がうかがえた．

本研究では，実証的な手法を用いて，女子大学生（以下，女子大生）のワークキャリアとライフキャリアに関連する実態調査を行う．はじめに，国立社会保障・人間問題研究所が 2015 年に実施した「結婚と出産に関する全国調査（以下，15 年度調査）¹⁾」と 17 年度に筆者が実施した調査（以下，17 年度調査）²⁾と 18 年度の本調査結果を比較する．次に，学年・所属・理想ライフコース別のキャリア意識を明らかにし，時間的展望とキャリア意識の違いに注目しながら探索的に検討を加え，女子大生の教育指導と支援の方策を探るための基礎資料を得ることを目的としている．

2. 研究実施内容

1) 調査対象者および時期

2018 年 4～5 月上旬に関東圏にある偏差値レベ

ルが同程度の 3 つの女子大学（A 大，B 大，C 大）に在籍する 1 年生から 4 年生 507 名に質問紙調査を実施した．うち，属性不備により不使用のサンプルを除いた合計 484 名を分析対象とした．

2) 調査項目

(1) 属性：学年と所属（職業がある程度限定される学科と限定されない学科を分類するため）を尋ねた．

(2) キャリア意識：キャリア意識という概念は多様な捉え方があるが，本研究では，就職活動に関連したものに限定している．それゆえ，下村ら（2013）³⁾によるキャリア意識の発達に関する効果測定テスト（キャリア・アクション・ビジョン・テスト：CAVT）を採用した．同尺度は，将来に向けてどのくらい熱心かつ積極的に行動しているかを測定する「アクション」6 項目と将来に向けてやりたいことなどをどのくらい明確にしているか，またはそれに向けて準備しているかを測定する「ビジョン」6 項目の合計 12 項目で構成される．本調査では，「かなりできている」(5)～「できていない」(1)の 5 件法とした．

(3) 理想ライフコース：本研究は，一女子大学の単一的・限定的な調査を回避し，さらに全国調査結果（代表サンプル）と比較することで女子大生の一般的傾向を探ることを目指している．それゆえ，女子大生の理想ライフコースを尋ねる項目は，15 年度調査を参考にした．本調査では，①専業主婦，②再就職，③両立，④DINKS，⑤非婚就業の 5 つのライフコースと，⑦わからない，の計 6 つの選択肢の中から，ひとつを選ぶ方式とした．

(4) 過去・現在・未来についての自由記述：過

去, 現在, 未来について, 大切なことを自由記述で回答を求めた。

3) 分析方法

15 年度調査・17 年度調査 (A 大・B 大に在籍する 1 年生から 4 年生 311 名) と比較する。クラスター分析, 探索的因子分析, 群間の比較は, IBM SPSS Statistics Ver.21.0 を使用した。

4) 成果

(1) 理想ライフコース比較

15 年度調査の結果報告書は, 学歴別, 理想ライフコース別, 未婚者等 (女性) に集計されていた。それゆえ, 本調査結果と 15 年度調査の該当箇所である女子大生データを抽出し, 表 1 を作成した。17 年度は, 15 年度に行われた全国調査の結果とほぼ同じ傾向を示していたが, 18 年度は, 「専業主婦」「再就職」が減少し, 「両立」「DINKS」「非婚就業」「わからない」が増加していた。

表 1. 理想ライフコース比較 数値: %

年度	専業主婦	再就職	両立	DINKS	非婚就業	わからない
15 年	16.97	38.07	32.11	2.75	5.50	4.59
17 年	17.36	35.69	32.15	3.54	4.50	6.75
18 年	14.88	30.17	34.71	3.93	6.40	9.92

(2) キャリア意識 (CAVT) の状況

17 年度の CAVT の 12 項目の平均値は, 3.31 から 2.54 の間に分布していた。平均値の高い項目は「将来のことを調べて考える」「何ごとにも積極的に取り組む」であった。一方, 平均値の低い項目は「尊敬する人に会える場に積極的に参加する」「将来のビジョンを明確にする」であった。

18 年度の CAVT の 12 項目の平均値は, 3.25 から 2.53 の間に分布していた。平均値の高い項目は「将来のことを調べて考える」「将来, 具体的に何をやりたいかを見つける」「何ごとにも積極的に取り組む」であった。一方, 平均値の低い項目は「尊敬する人に会える場に積極的に参加する」「学外の様々な活動に熱心に取り組む」であった。

(3) 被験者を変数としたクラスター分析

CAVT の 12 の質問項目の類似性をみるため, 被験者を変数としたクラスター分析を行った結果, 17・18 年度のテンドログラムでは 3 つの構造が確認された (図 1・2)。第 1 は, 上から「将来のビジョンを明確にする」「将来の夢をはっきりさせ目標を立てる」

る」「将来具体的に何をやりたいかを見つける」「自分が本当にやりたいことを見つける」に類似性がみられ「ビジョン」としてのまとまりを確認できた。中央に位置する第 2 は, 「人生に役立つスキルを身につける」「将来に備えて準備をする」に類似性がみられ, 「アクション」と「ビジョン」の 2 因子が混在していた。第 3 は, 「尊敬する人に会える場に積極的に参加する」「様々な人に出会い人脈を広げる」「学外の様々な活動に熱心に取り組む」に類似性がみられ「アクション」としてのまとまりが確認された。

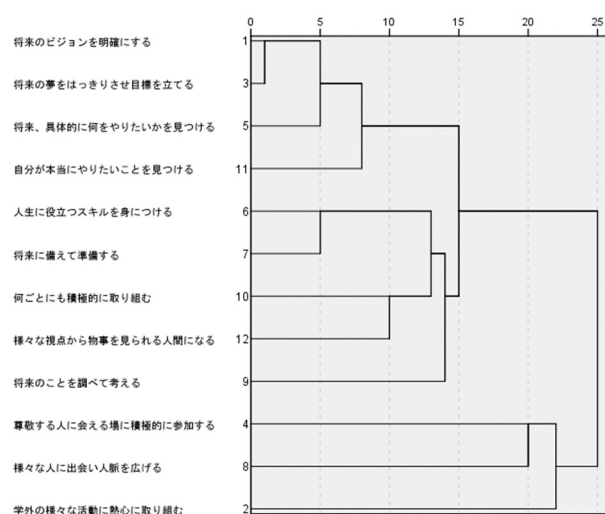


図 1. 17 年度テンドログラム

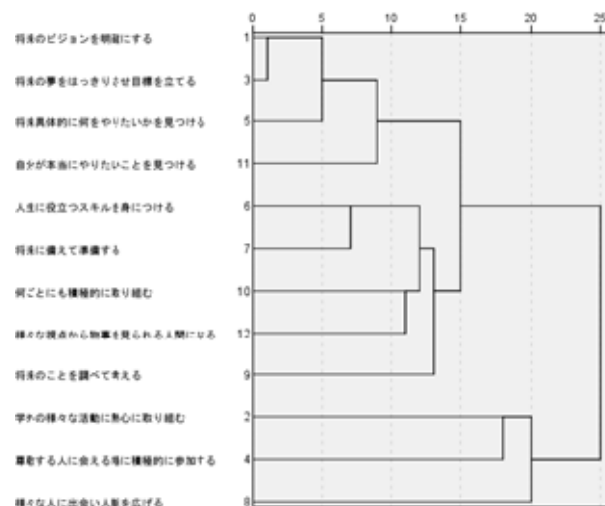


図 2. 18 年度テンドログラム

(4) キャリア意識の年度差

17 年と 18 年の年度差を検討するために, CAVT の 12 項目の得点について t 検定を行った。その結果, 12 項目の年度差は有意ではなかった (将来のことを調べて考える: $t=0.21, df=794, n.s.$ 以下省

略)。それゆえ以後の分析は、最新でかつ分析対象数が多い 18 年度データを用いて検討することとした。

(5) キャリア意識の因子分析

CAVT の 12 項目について得点分布を確認したところ大きな偏りは見られなかったため、12 項目に対して最尤法による因子分析を行った。固有値の変化は、5.28, 1.72, 0.84, 0.77 (以下省略) というものであり、2 因子、4 因子も検討したが 3 因子構造が妥当であると考えられた。因子間の相関が考えられたため、再度 3 因子を仮定して最尤法・プロマックス回転による因子分析を行った。プロマックス回転後の最終的な因子パターンと因子間相関を表 2 に示す。なお、回転前の 3 因子で 12 項目の全分散を説明する割合は 54.83% であった。

第 1 因子は 5 項目で構成されており「将来の夢をはっきりさせ目標を立てる」「将来のビジョンを明確にする」など、将来の夢や目標、ビジョンを明確にし、やりたいことを見つけるといった目標に向かわせる心理的な過程を示す項目が高い負荷量を示していた。そこで、「動機付け」因子と命名した。

第 2 因子は 5 項目で構成されており「様々な人に出会い人脈を広げる」「何ごとにも積極的に取り組む」「尊敬する人に会える場に積極的に参加する」など、社交的な活動や積極性により自身の拡張を目指す内容の項目が高い負荷量を示していた。そこで、「視野拡大」因子と命名した。

第 3 因子は 2 項目で構成されており「将来に備えて準備する」「人生に役立つスキルを身につける」といった、備えや役立つスキルの修得により将来の自分を助ける保険的な意味を表す内容の項目が高い負荷量を示していた。そこで、「備え意識」因子と命名した。

表 2. キャリア意識の因子分析

	I	II	III
3. 将来の夢をはっきりさせ目標を立てる	.988	-.091	-.015
1. 将来のビジョンを明確にする	.908	-.051	-.023
5. 将来、具体的に何をやりたいかを見つける	.843	-.006	.037
11. 自分が本当にやりたいことを見つける	.654	.185	-.010
9. 将来のことを調べて考える	.375	.097	.239
8. 様々な人に出会い人脈を広げる	-.163	.704	.074
10. 何ごとにも積極的に取り組む	.127	.655	-.049
4. 尊敬する人に会える場に積極的に参加する	.084	.645	-.076
2. 学外の様々な活動に熱心に取り組む	-.043	.564	-.019
12. 様々な視点から物事を見られる人間になる	.121	.384	.132
7. 将来に備えて準備する	.099	-.110	.860
6. 人生に役立つスキルを身につける	-.021	.175	.636
因子間相関	I	II	III
I	—	.456	.645
II		—	.604
III			—

(6) 下位尺度間の関連

キャリア意識の 3 つの下位尺度に相当する項目の平均値を算出し、「動機付け」下位尺度得点 ($M=3.06, SD=.908$), 「視野拡大」下位尺度得点 ($M=2.88, SD=.731$), 「備え意識」下位尺度得点 ($M=2.98, SD=.846$) とした。内的整合性を検討するために各下位尺度の α 係数を算出したところ、「動機付け」で $\alpha=.896$, 「視野拡大」で $\alpha=.742$, 「備え意識」で $\alpha=.756$ という十分な値が得られた。また、3 つの下位尺度は互いに有意な正の相関を示した。これらの相乗作用により、キャリア意識はより高められることが示唆された。

(7) 学年差についての考察

学年の影響を分析するために、一元配置分散分析を行った結果、学年の効果に有意差が認められた。Tukey HSD 法 (5%水準) を用いた多重比較では、「1 年」は「2 年」より、「4 年」は「2・3 年」より「動機付け」が高値を示した。また「4 年」は「1・2 年」より「備え意識」が高値を示した。一方、「視野拡大」には有意差は認められなかった。

「1 年」は「2 年」より、「4 年」は「2・3 年」より「動機付け」が高値を示し、また「4 年」は「1・2 年」より「備え意識」が高値を示したのは、調査時期が大きく影響したと考えられる。1 年生は、大学生活への期待が「動機付け」を高め、4 年生は、就職活動が「動機付け・備え意識」を高めたと考察される。

(8) 所属差についての考察

所属差の検討を行うために、3 つの下位尺度得点について t 検定を行った。その結果、「動機付け」「視野拡大」「備え意識」は、職業がある程度「限定される」ほうが「限定されない」よりも有意に高い得点を示した。職業がある程度「限定される」学生は、「限定されない」学生に比べて「動機付け・備え意識」が入学前より明確であることは、容易に説明できる。また、相乗作用により「視野拡大」は高められ、学内・学外での様々な活動に熱心に取り組むことで人脈は広がり、機会 (チャンス) への遭遇率も高まると考えらる。

(9) 理想ライフコース差についての考察

理想ライフコースの影響を分析するために、一元配置分散分析の結果、理想ライフコースの効果に有意差が認められた。Tukey HSD 法 (5%水準)

を用いた多重比較によれば、「両立・再就職」は「専業主婦・わからない」より「動機付け」が高値を示した。また「両立・再就職」は、「非婚就業」より「視野拡大」が高値を示し、「両立・再就職」は「わからない」より「備え意識」が高値を示した。「両立」を選択した学生は「動機付け・視野拡大・備え意識」の全てが高く、今後も進路選択を活発に行うことが予想され、働き手としての活躍も期待される。理想ライフコースは、15・17 年度に比べ「専業主婦・再就職」が減少し、「両立・DINKS・非婚就業・わからない」が増加したが、表 1 に示した理想ライフコース比較を見る限り、依然として 45%は出産・育児を中心とする家庭を重視する傾向がある。「専業主婦」が将来の夢や目標となることで「動機付け」が高まらず、就労意欲を妨げる要因となっていると考察される。「わからない」を選択した学生は、理想ライフコースだけでなく、将来について何も考えていない、考えたくない、あるいは、考えないという習慣化により「動機付け・備え意識」が低値となった可能性もある。「非婚就業」を選択した学生が「両立・再就職」より「視野拡大」が低値となったのは、“結婚しないという選択”が、学生の視野を狭める要因となり、消極的な意識や態度となって表出したと考察される。

3. まとめと今後の課題

本研究は、17・18 年度に行ったキャリア意識の効果測定テスト (CAVT) を用いて、女子大生のキャリア意識類型を検討し、女子大生の社会的・職業的自立に向けた教育指導と学生支援の方策を探るための基礎資料を得ることを目指した。その結果、従来、CAVT が「アクション」と「ビジョン」と 2 因子からの分析アプローチであったが、本研究では「動機付け」「視野拡大」「備え意識」と解釈される 3 因子構造が確認された。これにより、学年差や所属差、理想ライフコースごとの結果がより深く考察することが可能となった。また、3 因子の相乗化によりキャリア意識はより高められ

ることが示唆された。

本研究では、CAVT のクラスター分析、探索的因子分析ならびに抽出された 3 因子を用いた考察に時間を費やした。今後の課題は、過去・現在・未来の自由記述の量的な検討と、キャリア意識の高低と自由記述の内容に違いがあるか等の質的な検討を行う予定である。また、追跡調査を定期的に行い、学生の意識変化や教育効果を検証するなど、女子大生の社会的・職業的自立に向けた継続的な教育プログラムの改善が重要であると考えられる。

参考文献

- [1] 国立社会保障・人口問題研究所 (2017) 「2015 年社会保障・人口問題基本調査 (結婚と出産に関する全国調査): 現代日本の結婚と出産—第 15 回出生動向基本調査報告書—」
http://www.ipss.go.jp/ps-doukou/j/doukou15/NFS15_reportALL.pdf, (参照 2017-8-21)。
- [2] 戸田里和・岩瀬靖彦 (2018) 「女子大学生のキャリア意識: 学年差および理想とするライフコース別の検討」大妻女子大学『人間生活文化研究』28,131-136。
- [3] 下村英雄・八幡成美・梅崎修・田澤実 (2013) 「キャリア意識の測定テスト (CAVT) の開発」『大学生の学びとキャリア—入学前から卒業までの継続調査の分析—』,法政大学出版局, pp.17-40。

4. この助成による発表論文等

本研究は、大妻女子大学人間生活文化研究所の研究助成 (R 3003) を受けたものです。

学会発表

- [1] 戸田里和, 女子大学生のキャリア意識に関する新たな分析視点: CAVT を用いた意識類型の考察, 日本キャリアデザイン学会 第 15 回研究大会, 2018 年 9 月, 関西大学 (大阪府吹田市)